

## 記紀神話における性器の描写

——描かれたホトと描かれなかったハゼ——

深沢 佳那子

〔キーワード…①日本神話 ②性器崇拜 ③ホト ④男根 ⑤女陰〕

はじめに

アメノウズメノの舞踊に代表されるように、女性器、すなわちホトは神話に幾度も登場する要素である。古事記を中心に、ホトが含まれる神話は記紀に多く散見する。しかしその一方で、男性器が登場する神話というのは何故かひとつも存在しない。この不自然な差は何故生じたのであろうか。

本研究では神話に描かれた女性器と神話に描かれなかった男性器の背景にいかなる社会文化、信仰、思想が投影されているかを探り、神話における性器描写について改めて考察したい。

第一章

イザナミ

ホトが記紀神話に初めて登場するのは、イザナミがカグツチを生む説話である。

【古事記】次に生める神の名は、鳥之石楠船神、亦の名は天鳥船と謂ふ。次に大宜都比賣神を生みき。次に火之夜藝速男神夜藝を生みき、亦の名は火之炫毘古神と謂ひ、亦の名は火之迦具土神と謂ふ。此の子を生みしに因りて、美蕃登彖かえて病み臥せり。多具理邇生れる神の名は、金山毘古神、次に金山毘賣神。次に尿に成れる神の名は、波邇夜須毘古神、次に波邇夜須毘賣神。次に尿に成れる神の名は、彌都波能賣神、次に和久産巢日神、此の神の子は、豊宇氣毘賣神と謂ふ。故、伊邪那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。

この説話は一般に火の起源説話であると考えられ、神話が構築された背景として火山噴火説、焼畑農耕説、発火法説などが挙げられている<sup>(1)</sup>。

特に松村武雄氏を初めとする諸学者の説く火山噴火説は既に定説であり<sup>(2)</sup>、イザナミによる火の神の誕生とその死はまさに火山爆発の現象の神話化であるとされている。松村氏は噴火口や鍛冶の火床などをホトということからホトと混同したのだろうとする山田孝雄の説を踏まえ、ホトと呼ばれるもの（噴火口、炉、竈、女陰等）が皆本来「火処」より出て熱気のある所を称する名であると説いた<sup>(3)</sup>。

松前健氏はこの火山噴火説に概ね賛成しながらも、ここに発火法すなわち鑽火神話としての一面があること

を指摘した<sup>(4)</sup>。鑽火神話は初めフレーザーが火鑽杵を男根、火鑽臼を女陰と見立て、この摩擦によって火が発生するという信仰を背景にした神話をメラネシアやポリネシア、南米に見出したものである。「ホトから火が発生する」という神話は世界中で確認されている<sup>(5)</sup>。

松前氏は火山を司る冥府神たる女神が身体の各部に火を持ちそれをホトから生み出すオセアニアの神話が鑽火神話と火山信仰の結合であると推測した<sup>(6)</sup>。そしてカグツチ神話の成立背景にもこの考え方が適用できると考え、イザナミの火の神出産はオセアニアのものと同じく元来存在した鑽火神話と火山信仰とが融合したものだとしたのである。

また大林太良氏はイザナミの病臥後にその吐瀉物・糞・尿、イザナキの涙、殺されたカグツチの体の各部分から生じた神々を化生型の神と定義し、その性質がオホゲツヒメやウケモチに見られる死体化生型作物神話と同じものであるとした<sup>(7)</sup>。このオホゲツヒメ・ウケモチの神話、いわゆるハイヌウエレ型神話についてはあとで触れるが、この女神は生きているときに吐瀉物や排泄物から食物を生み出し、殺されたあとにその体の各部分から様々な穀物や豆や蚕が発生するという性質を持っている。大林氏によると、この死体化生型の作物起源神話の分布は火が本来女神の陰部にあったという神話の分布と大体重複しており、焼畑耕作民俗文化にその母体があると考えられる。従ってカグツチ神話の背景に焼畑農耕が見出せるのだと言う<sup>(8)</sup>。また、このカグツチの誕生と様々な食物神の誕生が関連して語られていることに關しても、オセアニアおよび世界各国の火の起源神話が同時に食物調理の起源も語ることを指摘し、それが日本神話にも当てはまると説いている<sup>(9)</sup>。吉田敦彦氏も、この地母神的女神が体を火に焼かれることで人間の生活に必要なものを生み出してくれるという物語はまさに火で焼かれた地面から作物を生じさせる焼畑の神話化だとした<sup>(10)</sup>。

これまで説いてきたように、カグツチ神話は複数の火の神話によって複合的に完成された神話であると考えられる。しかし、いずれの要素を見てもこの神話が「イザナミ、つまり地母神たる女神が火を体内に有している」というモチーフを中心として描かれていることは間違いなく、それこそがこの神話の核となる部分と言えるだろう。

吉田氏は縄文中期頃に使われていた「釣手土器」という深鉢型の土器を紹介し、この土器の内部に焼け焦げの跡があること、また腹の膨らんだ女性の形を表したものがあることから、この土器はまさに体内に火を宿す女神の姿を模しているのだと指摘している<sup>(11)</sup>。そして地母神たる女神が体を焼かれながらも人間のために火を妊娠し生んでくれる様子を釣手土器で再現し、火の恵みを女神に感謝していたのだろうと推測した。

通説である火山噴火説は確かにカグツチの誕生からその死により生まれた神々の物語までを全て包括して説明できる解釈ではあるが、古代人の実生活に根付いた信仰とは考えにくい。むしろその最も根源にあるのはまさしく「火を体内に有し、生み出すことのできる女神」そのものへの信仰ではないだろうか。この神話には確かに焼畑農耕の思想などが反映されていただろうが、この神話の最も核となるのは火を人々に与えてくれたと信じられていた地母神信仰であっただろう。

ではここで主題である「ホト」に立ち戻ってこの神話を見てみたい。

ここにおけるホトはカグツチを出産するための産道として描かれており、火を体内に持つ女神の身体表現の一部であるに過ぎないとも言える。しかしこの神話における「ホト」は出産の「生」ではなくむしろイザナミの「死」を表現する為のモチーフであると考えられる。物語の構成上イザナミはここで死なねばならず、その死因として選ばれたのが「ホトの破壊」であった。本来「生」を象徴するものであるはずのホトは、何故「死」

を描くためのモチーフとして選択されたのであろうか。

以下、記紀に見える「死」と関連するホトの物語を取り上げ、その意義について考察したい。

### オホゲツヒメとウケモチ

『古事記』と『日本書紀』にはそれぞれオホゲツヒメとウケモチ神を主人公とした、実に類似する物語が収められている。

【古事記】 又食物を大氣津比賣神に乞ひき。爾に大氣都比賣、鼻口及尻より、種種の味物を取出して、種種作り具へて進る時、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひて、穢汚して奉進ると爲ひて、乃ち其の大宜津比賣神を殺しき。故、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰麥生り、尻に大豆生りき。故是に神産巢日御祖命、茲を取らしめて、種と成しき。

【日本書紀】 保食神、乃ち首を廻して國に嚮ひしかば、口より飯出づ。又海に嚮ひしかば、鰭の廣・鰭の狭、亦口より出づ、又山に嚮ひしかば、毛の鹿・毛の柔、亦口より出づ。夫の品の物悉に備へて、百机に貯へて饗たてまつる。是の時に、月夜見尊、忿然り作色して曰はく、「穢しきかな、鄙しきかな、寧ぞ口より吐れる物を以て、敢へて我に養ふべけむ」 廻ち劔を抜きて撃ち殺しつ。然して後に復命して、具に其の事を言したまふ。時に天照大神、怒りますこと甚しくして曰はく、「汝は是悪しき神なり。相見じ」とのたまひて、乃ち月夜見尊と、一日一夜、隔て離れて住みたまふ。是の後に、天照大神、復遣天熊人を遣はし

て往きて看しめたまふ。是の時に、保食神、實に已に死れり。唯し其の神の頂に牛馬爲る有り。顛の上に粟生れり。眉の上に蠶生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稻生れり。陰に麥及び大小豆生れり。天熊人、悉に取り持ち去きて奉進る。時に、天照大神喜びて曰はく、「是の物は、顯見しき蒼生の、食ひて活くべきものなり」とのたまひて、乃ち以粟稗麥豆を以ては、陸田種子とす。稻を以ては水田種子とす。又因りて天呂君を定む。即ち其の稻種を以て、始めて天狹田及び長田に殖う。其の秋の垂類、八握に莫莫然ひて、甚だ快し。又口裏に鰾を含みて、便ち抽絲くこと得たり。此より始めて養蠶の道有り。

これによく似た神話はインドネシア、メラネシア、ポリネシアから南北両アメリカ大陸にかけて分布しており、この話型は「ハイヌウエレ型神話」と呼ばれている。ハイヌウエレ神話とはインドネシアのウエマーレ族の間で語られている芋の起源神話で、大便として宝物を排泄することのできる少女・ハイヌウエレがその能力を人々に妬まれて殺され、その死体を切り刻んで地面に埋めたところ、そこから様々な種類の芋が発生したという物語だ。

オホゲツヒメ、ウケモチ神話と比較して、人々にとってありがたいものを生み出す女神とその殺害という相似性が認められ、ウエマーレ族にとって伝統的な主食である芋が発生するハイヌウエレ神話と、日本人の主食であった五穀が発生したオホゲツヒメ、ウケモチ神話は軌を一にしていることが判る<sup>(12)</sup>。

ハイヌウエレ型神話の分布中心地では古来、芋と果樹を主とする人類最古の原始的な栽培法が行われており、彼らはイエンゼンによって「古栽培民」と呼ばれた。吉田敦彦氏はその古栽培文化を持つニューギニアのマリンド・アニメ族が行っていた、マヨ娘と呼ばれる若い女の生贄が祭に参加した男たちによって犯された上殺

されて食べられる「マヨ祭儀」という儀式を紹介している。マヨ娘の骨は植えたばかりのココヤシの側に埋められ、血はヤシの幹に赤く塗りつけられたという。吉田氏はこの残忍な儀式が、ハイヌウエレ型神話の女神と同質のものであると指摘した<sup>13)</sup>。

ハイヌウエレ型神話とマヨ祭儀の背景には共に殺されることで作物を生む女神への信仰があることが認められ、マヨ祭儀においてそれは豊穰儀礼にも通ずるものであった。そのハイヌウエレの女神の母体こそが食べ物を生み出すありがたいものだとしてされていたのだ。オホゲツヒメ、ウケモチ神話が同様の信仰に基づいて語られたものであることは十分に考えられる。

更に吉田氏はハイヌウエレの女神を考古学的見地から見出す例として、土偶を挙げた。

土偶の殆どが女性を模したもので、時に腹が膨れ妊娠線を持つ妊婦の姿を表現していたりすることは周知の事実である。土偶は破壊された状態で発見される例が多く報告されているが、これはもともと別々の粘土の塊を接合する製作法により、壊しやすく作られていたという。つまり土偶は初めから壊すという目的を持って製作されていたのだ。吉田氏はこの土偶とハイヌウエレの背景に同一の信仰があるとし、土偶を破壊する行為こそが、女神の殺害を表す豊穰儀礼だと指摘した。吉田氏はこの時代には既にハイヌウエレ型神話が語られていたとし、日本のハイヌウエレの女神への信仰の原初的な姿を土偶に見出したのである。

また縄文中期に作られた、煮炊き用の深鉢という土器の中に、腹が膨れ妊娠した女性を表していると思われる「人面把手付き深鉢」というものがあるという。これは腹の部分で食物を煮炊きすることでまさに女神の体の中で調理される様子を表現したものであり、体からご馳走を生み出す様はオホゲツヒメ、ウケモチ神話と非常に似ている。吉田氏は縄文時代の人々が既にハイヌウエレの女神を観想しながら、女神の姿を見立てた深鉢

で料理を作っていたと推測しているのだ。

既にイザナミの項で軽く触れたように、この食物起源神話と火の起源を語る神話との結びつきが大林太良氏によって指摘されている。大林氏はハイヌウェレ型神話を持つ古栽培民の間に女の体内から火が生じるとする火の起源神話が見られることから、このふたつの神話の中心が熱帯のイモ類栽培文化であると考えた<sup>14)</sup>。

更に吉田敦彦氏はイザナミの項で取り上げた「釣手土器」に表された火の母神と土偶や人面把手付き深鉢などに表された女神が本来別のもではなかったと説いた。いずれも、自己犠牲を以て人々の生活に欠かせないものを生み出してくれる地母神として信仰されていたと考えられる。オホゲツヒメ、ウケモチ神話がこの原始的な地母神信仰に基づいて出来上がったものであるとしたとき、カグツチ神話におけるイザナミの姿にも同じ信仰背景を見いだすことができるだろう。

#### ヤマトトトヒモソヒメとハタオリメ

カグツチ神話に見た「ホトを破壊することで女神が死ぬ」という話形で最も顕著な例のひとつと呼べるものが、崇神天皇紀のヤマトトトヒモソヒメの死にまつわる、いわゆる箸墓伝承である。

【崇神紀】是の後に、倭迹々日百襲姫命、大物主神の妻と爲る。然れども其の神常に晝は見えずして、夜のみに來す。倭迹々姫命、夫に語りて曰はく、「君常に晝は見えたまはねば、分明に其の尊顔視ること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に、仰ぎて美麗しき威儀を覲たてまつらむと欲ふ」といふ。大神對へて曰はく、「言理灼然なり。吾明旦に汝が櫛笥に入りて居らむ。願はくは吾が形にな驚きましそ」とのたまふ。爰に



倭迹々姫命、心の裏に密に異ぶ。明くるを待ちて櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ大さ衣紐の如し。則ち驚きて叫啼ぶ。時に大神恥ぢて、忽に人の形と化りたまふ、其の妻に謂りて曰はく、「汝、忍びずして、吾に差せつ。吾還りて汝に差せむ」とのたまふ。仍りて大虚を踐みて、御諸山に登ります。爰に倭迹々姫命仰ぎ見て悔いて急居。則ち箸に陰を撞きて薨りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故、時人、其の墓を號けて、箸墓と謂ふ。是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手遞傳にして運ぶ。

吉田知子氏は、この箸は丹塗矢伝承に代表される神婚説話において登場する「神のよりしろ」、つまり男根の象徴であると言及した<sup>15)</sup>。次項で紹介する丹塗矢伝承と箸墓伝承には共通点が多く見られ、同じ括りの神話であるとする意見は多い。しかし箸墓伝承ではヤマトトトヒモソヒメが死亡し神婚は不成立という結末を迎える一方、丹塗矢伝承では神婚が成立し子が生まれる。同じ「何かがホトを突く」という話型の神話ではあるが、死と生という真逆の結末である以上、これらの神話を安易に同じ括りと考えるべきではないだろう。箸墓伝承はむしろ墓の起源説話である以上「箸がホトを突いて死ぬ」という要素が中心となる話である。そして同じ要素を持つ説話は天石屋戸神話の中に見ることができる。

【古事記】爾に速須佐之男命、天照大御神に白ししく、「我が心清く明し。故、我生める子は手弱女を得つ。此れに困りて言さば、自ら我勝ちぬ。」と云して、於勝佐備に、天照大御神の營田の阿を離ち、其の溝を埋め、亦其の大嘗を聞看す殿に屎麻理散らしき。故、然爲れども天照大御神、登賀米受て告りたまひしく、「屎

如すは、酔ひて吐き散らす登許曾。我が那勢の命、如此爲つらめ。又田の阿を離ち、溝を埋むるは、地を阿多良斯登許曾、我が那勢の命、如此爲つらめ。」登詔り直したまへども、猶其の悪しき態止まずて轉かりき。天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、其服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて、墮し入るる時に、天の服織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。

この説話は記紀によってそれぞれ異なる展開が生じており、ホトが登場するのは古事記のみである。

この神話で重要な箇所は「神聖な忌服屋」がスサノヲによって穢されることと、それがアマテラスの「見畏む」引き金となることだ。これはスサノヲによるハタオリメの殺害ともとれるエピソードであり、アマテラスは自身の分身にも近い巫女のハタオリメを殺されたことで恐怖心を抱き、石屋戸に隠れるのである。実際、日本書紀本文ではこの神話はアマテラスが傷つけられ、一書の二ではアマテラスがスサノヲの排泄物の上に座ったことにより病気になるという筋書きとなっている。これはこの伝承がアマテラス本人を傷つけることと等しい暴力性を物語るものであると考えると良いだろう。そのアマテラス本人を傷つけるに等しいハタオリメの死の原因としてホトが選ばれた理由は、すなわちホトが生そのものを表すものであったからだと考えるのが妥当だ。ホトがその機能から生と密接に関わっていることは想像に容易い。生を産み出す場であるホトを破壊することで、対義である死を表現したのである。

それと同時にホトは女性性の象徴であり、女性の神聖性が収斂するものであったのだと推測される。ホトに女性の神聖性が宿るということは後で紹介するアメノウズメの神話が最も顕著に表しているが、アメノウズメに限らずホトに何らかの呪力があるとする解釈は既に一般的である。古代では巫女に代表される女性の持つ霊

力が認められ、女性の神聖性への一種の信仰が根付いていた。ホトに宿る呪力とはまさに女性が持つと考えられていた霊力そのものであった。従ってホトの破壊とは物理的に生を破壊し死を招くだけでなく、その女性の神聖性を破壊するという意味にも繋がっていたのだ。アマテラスの石屋戸隠れの原因は、ホトの破壊により女性性、女性の持つ神聖性を傷つけられたことである。女性の神聖性を認めていたからこそ、それを否定するような物語が構築されたのだろう。

同じく、箸墓伝承で語られたホトの破壊も、生の象徴の破壊と女性性の否定という要素が強いものだと考えられる。

箸墓伝承の核は箸墓の名称の起源を語ることであり、箸はそのために登場した府会的なものである。墓の名称起源譚である限りそこに埋葬される人物の死は必然的に描かれなければならない。その死は「見るな禁」と呼ばれるタブーを犯すことで引き起こされた。この「見るな禁」とは、生と死を区分けし文節化するために発生するものである<sup>(16)</sup>。箸墓伝承における「見るな禁」は見ること自体を禁じているわけではないが、禁忌を破り、結果的に神に「恥」をかかせるという筋が成立している。そしてタブーを犯したことにより罰に近い死を迎えなければならなかったヤマトトトヒモソヒメは、生そのもの・女性性の象徴であるホトの破壊を強いられた。この異常とも言える死は、女性の神聖性を否定するような目的を持ったものであった。

ハタオリメの梭とヤマトトヒモソヒメの箸はいずれも男根を象徴する要素などではなく、女性性を否定し殺害するために用意された道具に過ぎない。梭は忌服屋での殺害にふさわしい道具、箸は名称起源譚に合わせた道具として選ばれたのだろう。そしてそのいずれも、ホトを突き刺すという行為が、女性性自体を否定する屈辱的な死を引き起こすという結末に繋がっている。ヤマトトトヒモソヒメは神との間のタブーを犯したこ

とで報復的な死を遂げ、ハタオリメはアマテラスを恐れさせるためスサノヲによって理不尽に殺害された。女神が生象徴であるホトの破壊によって死ぬとき、それは単なる死ではなくマイナスの意味を含む死になると考えられる。そしてイザナミの死もまた、このホトの破壊によるマイナスの死であった。

しかしイザナミとヤマトトトヒモソヒメ・ハタオリメの神格には大きな相違点がある。イザナミが地母神であり、その生産性がカグツチ神話に繋がると説いたが、ヤマトトトヒモソヒメとハタオリメには地母神の性格を認めることは出来ない。地母神がその身体から人々の為になるものを生み出すという原初的信仰が反映されたイザナミ神話と、巫女の殺害を語るヤマトトトヒモソヒメ・ハタオリメ神話はホトというフィルターを通して、同質のものとして語ることが出来るだろうか。

一方、箸墓伝承との類似が指摘されている丹塗矢伝承では箸墓伝承とは真逆の結末が用意されており、ホトは「生」と密接に関わっている。

#### セヤダタラヒメ

ホトが生と関連する説話である所謂「丹塗矢伝承」は、古事記中巻、神武記の婚姻譚だ。

【古事記】故、日向に坐しし時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比賣娶して生める子は、多藝志美美命、次に岐須美美命、二柱坐しき。然れども更に大后と爲む美人を求きたまひし時、大久米命曰しけらく、「此間に媛女有り、是を神の御子と謂ふ。其の神の御子と謂ふ所以は、三嶋湊昨の女、名は勢夜陀多良比賣、其の容姿麗美しかりき。故、美和之大物主神、見感でて、其の美人の大便爲れる時、丹塗矢に化りて、其

の大便爲れる溝より流れ下りて、其の美人の富登を突きさき。爾に其の美人驚きて、立ち走り伊須須岐伎、乃ち其の矢を將ち來て、床の邊に置けば、忽ちに麗しき壯夫に成りて、即ち其の美人を娶して生める子、名は富登多多良伊須須岐比賣命と謂ひ、亦の名は比賣多多良伊須氣余理比賣是は其の富登と云ふ事を惡み、後に名を改めるぞ。と謂ふ。故、是を以ちて神の御子と謂ふなり」とまをしき。

この「セヤダタラヒメ」という神名について佐々木隆氏は、セ(瀬)ヤ(矢)ダタラ(立たら)姫であるとし、「瀬を流れてくる矢を立てられた姫」という意味を表しているとした<sup>(17)</sup>。

ここではオホモノヌシの化身である丹塗矢がホトを突き子供が生まれるという話から考えても、丹塗矢は單純に男根を象徴するものだと考えるのが妥当であろう。似たような話形であっても箸墓伝承とは全くの別物であると考えられる。

吉田知子氏が「神のよりしろ」と表現したように「弓矢」というモチーフはしばしば神との婚姻に登場するものである。類似の描写は『山城国風土記』逸文「賀茂社縁起」のタマヨリヒメの説話にも見ることが出来るが、ここでは川上から流れてきた丹塗矢をタマヨリヒメが拾って床の辺に差し置くだけで身ごもるという展開になっており、神の化身、もしくは象徴と考えられる矢がホトに突き刺さるとい話はない。おそらく日本書紀と同様にホトを突き刺すという話型であったものから、ホトの要素が脱落したものであろう。矢が男根を表し性交にも繋がる神話のひとつとしては、ハルヤマノカスミヲトコの説話もその流れを汲んでいると考えて良いだろう。この説話ではイシツヲトメを訪問したハルヤマノカスミヲトコが「藤の花に変化した弓矢」をヲトメの廁にかけることで結婚が成立する。丹塗矢伝承のような直接的表現ではなくかなり文学的に成熟した表

現を取り入れている印象だが、根本には矢(弓矢)が「男根の象徴」であるとする意識があるのだろう。

また佐々木氏はミゾクヒのクヒは「男根の象徴物である棒状の杭」、タケツノミの「ツノミ」は「角のような身」という意味を持ち、棒状のものを表す語であると指摘した。「男根を表す棒状の何かという意味の名を持つ父親」がこれらの物語の要となる要素であると考えられる。

「ホトと男根を示す物体の接合により神の子が生まれる」という話型から、丹塗矢伝承は単純に生殖・出産機能を司る身体の一部としてのホトを描いたものであり、これまで検証してきた「ホトと死」の神話群で逆説的に語られてきた女神のホトに宿る神聖性というものは汲み取ることができない。本来このように「生」と関わるはずのホトだからこそ、相反する「死」を表現するときに破壊されるという描写が用いられるのだろう。

#### アメノウズメノミコト

最後に取り上げるホトが登場する説話は、おそらくホトというモチーフの神話としては最も著名なものであろう。

【古事記】 天宇受賣命、天の香山の天の日影を手次に繋けて、天の眞拆を纏と爲て、天の香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に汗氣伏せて踏み登とどろこしり、神懸り爲て、胸乳を掛き出で裳緒を番登に忍し垂れき。爾に高天の原動みて、八百萬の神共に咲ひき。

この神話は、アマテラスの魂を呼び戻す意図の鎮魂祭が基盤となっているとするとする説、矛を以て覆槽を衝くと

いう表現が陰陽交合を象徴するという説が唱えられ<sup>(18)</sup>、いずれもアメノウズメ神話を構築した要素であることに間違いはなさそうである。

アメノウズメが神々を笑わせるためにそのホトを露出したことについて、松村武雄氏はホトが邪気を駆除する力を持っていることを前提に、この舞が呪術的意味を有しているとした<sup>(19)</sup>。「ホトが邪気を払う説話」は世界的に見られ<sup>(20)</sup>、「ホト」と「笑い」の両方に邪気を払い幸福を呼ぶ何らかの力を見出すとする説は既に定説である。

三浦佑之氏は「古代には三つの笑いがあった。エムとエラクとワラフがそれである。声があるかないかで分ければ、エムには声がなく、エラクとワラフには声がある。そして、エムとエラクとが親和する笑いであるのに対して、ワラフは相手を遮断した笑いである」とし、アメノウズメに対する「咲」とは満ち足りた気分での笑いである「エラク」であると説いた<sup>(21)</sup>。神々の「咲」が「ウヅメのいささか滑稽で卑猥な性的挑発に寄り憑かれた神々が、酒に酔ったように歓喜し満ち足りた状態になったというふうには解釈できる」ものであるとする三浦氏の言及通り、アメノウズメによって故意に笑わされたものであると考えるのがふさわしいだろう。一方、アメノウズメが猿田彦に対して「ワラフ」描写が日本書紀に見られる。

【日本書紀 一書(一)】 已にして降りまさむとする間に、先驅の者還りて白さく「一の神りて、天八達之衢に居り。其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺餘り。當に七尋言ふべし。且口尻明り耀れり。眼は八咫鏡の如くして絶然似赤酸醬に似れり。」とまうす。即ち従の神を遣して、往きて問はしむ。時に八十萬の神有り。皆目勝ちて相問ふこと得ず。故、特に天鈿女に勅して曰はく、「汝は是、目人に勝ちたる者なり。往きて

問ふべし。」とのたまふ。天鈿女、乃ち其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲啼ひて向きて立つ。

日本書紀の天石屋戸神話においては性器の露出が描かれなかったが、この天孫降臨の場面ではアメノウズメが「裳帯を臍の下に仰れ」ている様子が描写されている。

この場面はアメノウズメが天孫降臨を妨害しようとするサルタヒコを威嚇し圧倒するというもので、その目力が強力なものとして描写されていることは既に多く説かれている。

また、同じ天孫降臨神話におけるアメノウズメの描写を古事記のほうから引いてみると、アマテラスとタカギの神がアメノウズメに対して「汝は手弱女に有れども、いむかふ神と面勝つ神ぞ」と詔したとある。この「手弱女」という言葉は神女の姿に繋がる女性の神聖性を示す言葉でありながらも、同時に実社会で作られる性差を映し出しており、その二面が混沌として存在しているものと内藤明氏によって指摘された<sup>(22)</sup>。そしてそれは男の視線から、あるいは男の視線を意識した時に用いられ、そのような視線を作った社会構造や文化と関わる言葉であったとされている。たわやめという言葉はますらをの対義語であり、女性性を強調するものであった。アメノウズメは本来女性の持つ神聖性によって邪気を払う力を所持していたが、次第にただ強大な力を持つ神としての神格が強まっていったと考えるのが妥当ではないだろうか。

日本書紀の天石屋戸神話ではホトの露出は描かれず、代わりにアメノウズメの動作は「作俳優」とのみ表記されている。これはアメノウズメの卑猥ともいえる儀礼行為をわざをきという言葉に置き換え、性的描写を忌避したものと考えてよいだろう。紀の天孫降臨神話のアメノウズメの描写が記の天石屋戸神話のものに酷似し



ながらもホトという言葉が登場しないのもこれが理由だと考えられる。更に永藤氏はわざをきという表現に関し『古事記』の神話において構造化された祭儀的な場は、『日本書紀』においては後退して、芸能的なものとして語られている」と述べた<sup>(23)</sup>。つまり古事記で語られたアメノウズメの邪気を払いアマテラスを呼び戻すための儀式は、日本書紀においては既にパフォーマンスとして成立したものと描かれているということである。本来、女性性を象徴するホトの持つ力によって神々を笑わせて邪気を払うという儀式を行っていたアメノウズメだが、その儀礼行為が徐々にパフォーマンス化し、強い神としての性格が強く描かれるようになったのが紀の天孫降臨神話だろう。もともとホトを露出するという役割のみを担っていたはずのアメノウズメはいつの間にか自身も笑う神へと変化していた。アメノウズメの原初の姿はイムカフ神、面勝つ神でありながらも女性としての神聖性を強く保持する巫女であったと考えられる。

既に述べてきたようにここでのホトは邪気を払う力を持つもの、そして神々を笑わせるものとして描かれている。ホトと笑いはそれぞれアマテラスの石屋戸隠れを打破するための呪術的なモチーフとして登場しているが、なぜホトの露出が笑いに繋がるのかという疑問点を明らかにしたい。

これに対し池田弥三郎氏は荒ぶる神を鎮める為の手段として古代人は「神を笑わせる」ことが必要であると感じ、自分が笑われ者になることで神に笑ってもらおうという選択をしたと述べた。<sup>(24)</sup>。「人が笑うことは神も笑うであろう」という考えから、人を笑わせることが儀礼化し、それが喜劇の発生にも繋がったというのだ。これは的を射た意見であり、神話が現実的事象を反映している以上、当時の人間にとって「ホトの露出」が笑いの対象であったということは間違いない。樋口清之氏は性と笑いの関係性について、性そのものの自体に笑いの要素が含まれていると言及している<sup>(25)</sup>。樋口氏は更に、「こうした要素が本来的にあるからこそ、笑いに

招福・魔除の呪力があるという、性に対してと同じ信仰が生まれたのではないだろうか」と指摘し、性と笑いが共に持つ呪力の根拠について示した。

そしてアメノウズメを手弱女と表し、ホトの露出に笑うという物語の構造は、男性中心社会が持つ意識の反映ともとれる。いわばこれはこの神話が男性的視線から描かれているということと顕著に表す描写ではないだろうか。松村一男氏は、神話は男性中心の支配階層によって作られた秩序維持装置であり、神話の中の女性像は「男性支配者層に都合のよい女性像、つまりイマジネールの産物」だと述べている<sup>(26)</sup>。女性性の象徴であるホトによって危機を回避させたアメノウズメは、男性社会が期待する女性性そのものの具現化であったのかも知れない。

これまでホトが「死」と関わる話、「生」と関わる話と分類して論じてきたが、この天石屋戸神話は「生を呼ぶ神話」である。天石屋戸神話でのホトは、生殖と出産という本来の機能を保持したまま、もつと儀式的・神話的に昇華させたものだ。

永藤氏は、「闇に包まれた不毛の無秩序世界は、アメノウズメのホトの豊穰性、呪性によって、変換されることが期待されているのである」と述べ、天石屋戸開きに繋がるホトの呪力的一端が豊穰性であるとした<sup>(27)</sup>。しかしそれはおそらく二次的に発生した呪力であり、更にホトではなく女神の身体そのものに宿ると信じられていたものであろう。この女神の身体と豊穰性の関係については次章で詳しく述べるが、ここにおけるホトはその純粹な力を發揮しているものであり、その純粹な力とは女性が本来的に持っている信じられた神聖性である。女神の神聖なる力によって、神々が笑い、天石屋戸が開くのだ。アメノウズメのホトは「女性性の象徴」を超越し、女性の持つ神聖性が収斂する存在であると言えよう。

これら神話に登場するホトの意義とは、既に述べてきたように女性性の象徴であり、女性が持つ神聖性の象徴でもあった。そして元来ホトが物理的に保持している生産性という側面が生と直結するものであり、それ故ホトの破壊によって死を表す神話が生まれたのだと考えられる。一見、死の神話であったり生の神話であったり、時には露出する話であったりと統一性がないように思えるホトの神話群であるが、その背景には古代の男性中心社会で築かれた、ホトに女性の神聖性が宿るとする信仰があったのだ。

## 第二章

### ハゼの描写と形象

これまで記紀神話に散見する「ホト」を取り上げ論じてきたが、一方記紀における男性器についての描写はどうであろうか。

記紀の中にホトを含む神話が多く確認できる一方、男性器が登場する神話というのは見つからない。丹塗矢のような「男性器を表すと思われるモチーフ」は登場するものの、男性器そのものとして描いた神話を確認することはできないのだ。

男性器の古語は「ハゼ」「オハゼ」である。和名抄に「玉莖、房内経云玉莖（微）楊氏漢語抄云尿管（微）云麻莖良」とあり、男性器を指す言葉はハゼかマラだとされているが、ハゼのほうがより古い<sup>(28)</sup>。このハゼは記紀神話には登場しないと書いたが、実際にはハゼである可能性が指摘されている一節が古事記のカグツチ神話に登場する。それは死したカグツチの身体から神々が生まれる場面の「次於陰所成神名、閻山津見神」という記述である。「陰」の字はカグツチの陰部を指す言葉であるから、ここで適切と思われる読みはホトではなくハゼであ

ると考えられる。だが、この話は既に紹介したハイヌウエレ型神話に相似しており、おそらく同じ話型の中で語られた話であろう。本来的に女神を中心として語られていた話型的一端にカグツチ神話が組み込まれたとき、ハゼの機能を無視したまま「陰」に神が化成するという話になったのだと推測される。この「陰」はもちろんホトではないからハゼと読むべきではあるのだが、本質的にはハゼとして描かれていないと考えられるのだ。従って、記紀神話にはハゼがハゼとして描かれている箇所が見当たらないと言えるのである。

縄文時代まで遡ることができる女神に対する信仰とホトの神話の関係性を一章で述べたが、果たしてハゼに対する特別な思想・信仰はなかつたのであろうか。

古代のハゼに対する何らかの信仰を表したものとして最も顕著なものは石棒である。石棒の出現は旧石器時代まで遡ることができ、男性器をかたどり、何らかの祭儀に用いられていたものであるという一定の結論が出ている。

石棒の意義に関して、生殖行為そのものを表しているとする説<sup>(29)</sup>、土偶と同様に豊穰儀礼に関わるとする説<sup>(30)</sup>、再生を祈って墓に立てられたとする説<sup>(31)</sup><sup>(32)</sup>などが説かれているが、春成秀爾氏は「オハゼ形は男性の活力の依代であり、男性祖先を含む守護的な象徴」であり、「狩猟儀礼・農耕儀礼を問わず活力の象徴として、その力を發揮する場面があったのだろう」と説いた<sup>(33)</sup>。氏は「勃起したオハゼは威嚇・攻撃性の象徴」であるとし、石棒は必ずしも農耕儀礼や葬送儀礼・祖霊崇拜の儀式と関連付けられるものではなく、ハゼが本来持つ生命力から活力の象徴として用いられたとしている。

確かに近世以降に根付いたと考えられる各地の豊年祭では男根、もしくは男女和合の生産力から豊作を願う信仰対象としてハゼ形を祀る事例が多く見られる。石棒＝豊穰儀礼の祭具説はそういう事例を参考に唱えられ

ているのだろう。しかし性行為に見出せる生産性と「豊穰性」や「多産性」を結びつけて解釈することに対し、須藤健一氏は苦言を呈した<sup>34)</sup>。須藤氏は「もしかすると、性交＝豊穰という図式は、研究者の頭の中にある考えから作られたのではという不安もある」と懐疑的な意見を述べており、それは石棒にも適用できるものもあると考えられる。ハゼに豊穰性を見出すという信仰が古代に根付いていた論拠となる資料はなく、あとから理由づけられたものであると言わざるを得ない。そもそも生産性や生の象徴という意味がハゼに宿ると考えられていたとする定説も疑問視すべきではないだろうか。このようなハゼに対する思想は、子どもを生み出すというホトの機能と混同しているようにも思える。確かに生殖行為においてはハゼとホトは並立するものだが、そこから繋がる生産活動を担うのはホトであり、女性である。念頭に生殖行為がある所為か、性器について考察する場合もついハゼとホトに同じ性質を見出す傾向があるようだが、これらは一括りとして考えるべきものではないだろう。

石棒以外にも、縄文後・晩期の注口土器で、注ぎ口に勃起したハゼを模したものが関東・東北地方で報告されている。この土器の用途は不明だが、ハゼを模して作られた遺物が多く存在していることは事実である。記紀神話にほとんど登場しないハゼだが、神話を構築したであろう縄文宗教から連なる古代の日本人の意識の中においては、全く忘れ去られた存在ではなかった。

古墳時代になるとハゼ形を作る文化は一度失われた、もしくは著しく衰退したと考えられており、飛鳥・奈良時代になると再興する。これは大陸から新しい文化が流入したものである可能性が高い。一方で、ハゼ形が消失する古墳時代にはハゼを露出した状態の埴輪が群馬県佐波郡上武古墳や福岡県八女市岩戸山古墳から出土している。千葉徳爾氏はこれに近代の民間信仰において狩猟民が山の神に対して男根を露出する儀式との連続

性を見出した<sup>(35)</sup>。マタギの間では山の神に対して男根を捧げるという伝統儀礼があり、これが縄文の信仰にまで遡れるとする研究は多い<sup>(36)</sup>。千葉氏はこの裸体の埴輪がまさに当時の狩猟の再現である可能性を述べ、これも石棒から連なるハゼ形象文化の一端であるとした。

一方、書物に現れるハゼの記述は古語拾遺のものを待たねばならない。古語拾遺にはイナゴの害の除去のために男茎形(オハゼガタ)を作つて溝口に置いたという記述があり、これは当時既にハゼが何らかの力を持つと信じられていたことを示唆している。この古語拾遺の記述ではハゼは神の怒りを鎮め、耕作を滞りなく行うという願いを叶える為に登場した。これは民俗学的にはハゼに生産性を見出し、豊作を願う象徴としての役割が当てられている例だと推測するのが一般的であろう。しかしハゼはあくまで活力の象徴であり、「起死回生の作用あるいは生命力を引き寄せる力」があるとする千葉説<sup>(37)</sup>のほうが現実的ではなからうか。ただしこの記述は記紀神話を読み解く上では決して古いものであるとは言えず<sup>(38)</sup>、神話の源流を辿るという意味では必ずしも同じ思想が背景にあるとは言えない。

以上、古代のハゼを検証してみると、神話世界と現実世界ではその登場頻度が乖離しているようである。ハゼを造形する文化の基盤にはハゼに対する信仰が必ずあったはずだが、何故神話の中にハゼは登場しないのかという疑問を抱かずにはいられない。

### ホトの形象

では、神話の中に頻繁に登場していたホトの形象文化についてはどうかであろうか。

春成氏の報告によれば、縄文時代の遺構からホトそのものを造形したものは稀に見つかる程度であるという。

秋田県東由利町三升刈遺跡、岐阜県国府町荒城神社遺跡、愛媛県松山市船ヶ谷遺跡などから出土した石製品を除いては、ホトを写實的に造形したと確実に認められるような出土品の報告はない。弥生時代になっても状況は変わらず、ホト形象品の候補として石製品が二点挙げられているのみである。

縄文時代の遺物で女性性を最も表したものと例えば土偶が挙げられる。土偶はその殆どに乳房の造形や妊娠表現が見られ、女性を模したものであるとされていることは周知の事実だ。土偶の女性性を語る上ではしばしばその性表現が取り上げられるが、渡辺仁氏は殆どの土偶の身体に性器の描写がないことを指摘した<sup>(39)</sup>。度々「土偶の性器表現」として引かれるものは亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶と青森県八戸市八幡遺跡の板状土偶のみであり、土偶の既知例総数が一万点を越える事実を考えると、土偶の性器表現の例は極めて稀なものであるとしている。確かにこれを土偶の身体に表現された女性性のひとつとして普遍化することは難しい。神話とは裏腹に、形象文化におけるホトは殆ど見つけられないのである。

ところで、土偶の女性性とは一体何を表すものなのであるか。

土偶に対する信仰の定説として唱えられるものに、生産・豊穡への信仰、すなわち土偶が地母神であるとするものがある。つまり生産力を持つ母体としての大地への敬意が地母神に対する信仰を作り、その地母神を具象化したものが土偶であるというものだ。土偶を壊すこととハイヌウエレ型神話に共通性が見出せることは既に述べた。

一方、渡辺仁氏は土偶Ⅱ地母神説を否定し、土偶は「女神即安産の守神」であり、古代人にとって出産の守神であったとしている。土偶が性器を表さずに乳房と腹部膨隆の表現に固執していることから、これを単なる女神像ではなく母性像であると断定した。

まず、渡辺氏は土偶Ⅱ地母神説を否定した理由として、地母神信仰は農耕民の思想であって狩猟採集社会である縄文社会にはそぐわないという意見を述べている。氏は各国の地母神信仰の例を引いた上でそれらが全て農耕民の信仰であることを指摘した。狩猟採集民が求める収穫の豊かさは「自然種の周期的出現ないし規則的回帰によるもの」であり、それを祈願するのが彼らの生産儀礼であって、狩猟採集社会に地母神信仰が入り込む余地はないという。

しかし藤森栄一らによって唱えられた縄文中期農耕論を採用すれば、縄文時代に既に農耕民としての信仰があっても不思議ではない。藤森氏は縄文における穀物の貯蔵具などの発達に見る物質的根拠と、顔面把手付き土器や土偶への信仰を地母神へのものだとする推察から縄文中期農耕論を唱えていた<sup>(40)</sup>。更に現在は遺構からの発掘により物質的な証拠を以て縄文中期農耕論が確立しつつある。土器中から栽培植物の種子の痕跡を探し出す手法の応用などにより、縄文時代の栽培植物が科学的に立証されるようになってきたという<sup>(41)</sup>。縄文中期の土器から大豆と小豆の圧痕が見つかったことから、これらが中部高地や西関東地方では縄文時代前期から栽培され、縄文時代後期になると西日本や九州地方へ拡散していた可能性が高いことが判ってきた<sup>(42)</sup>。これを踏まえると、縄文が狩猟採集社会であるという理由から土偶が地母神でないとする渡辺氏の説は立証が難しいと考えられる。むしろ渡辺氏の考察によって農耕民の間には一般に地母神信仰が存在することが証明されており、土偶もそれに適応できることはほぼ間違いないだろう。ただし土偶の形象が女性性というよりはむしろ母性を描き出すためのものであったとする同氏の説には賛同できる。間違はなく土偶は単なる女性性の具象化ではなく、地母神を中心とした母性への信仰を背景に持つものであろう。表現されている乳房や妊娠の状態については、子を産む力、生産性がひいては地母神への信仰へ繋がるものであったからだと解することが出



来る。そして渡辺氏の唱えた「土偶＝女神即安産の守神」説はその女性を持つ力に起因する信仰であると考えられるから、これもまた否定することはできない。女性の生産性を具現化したという意味では、地母神説と安産の守神説のどちらにも同じ性格を定義することが出来るのだ。いずれにせよ、土偶が女性の生産性に基づく信仰によって編み出され、生む力を表現したものであるということは間違いない。そしてその生産性はホトに収斂するものではないと考えられていた可能性が高い。少なくとも土偶を作っている段階では、ホトではなく妊婦や女性の身体そのものが母性の象徴であったと考えられる。

以上のように神話に散見するホトとその形象文化を比較すると、矛盾とも思えるホトの扱いの差異が明らかになる。それはすなわち、イザナミ、ウケモチ、オホゲツヒメラ縄文時代から連なる地母神信仰を色濃く反映すると考えられる女神の神話でホトが描かれているのに対し、その縄文時代の造形品である土偶にはホトが描かれていないという点である。無論、縄文時代の信仰が全てそのまま神話に反映されているわけではないから、神話が構築されるまでの間にホトに対する信仰の形態が変わった可能性も十分にあるが、原初的な地母神信仰と神話で語られる地母神の姿の差異はなぜ生じたのであろうか。

### 神話描写と形象文化

ホトに対する神話描写と形象文化の差異を考える前に、まずもうひとつの主題であったハゼについて考察したい。

ハゼもまた神話描写と形象文化とは極端に登場頻度の差がある。古墳時代にハゼに対する信仰が衰退した可能性も指摘されるが、身体の一部自体に対する信仰というものはたとえ祀る文化が失われたとしても、神

話の中になんらかの形でその片鱗を見せていて当然だと思われる。

更に、神話とは男性社会によって構築されたものであるから、男性にとつて都合の良い男性原理主義的な男根崇拜思想が描かれていても不思議ではない。だが神話において語られるのは地母神である女神への信仰と最高神アマテラスの物語であり、かつて縄文時代にあったハゼに関する信仰の片鱗を見ることは出来ない。これは一体何故か。

これはすなわち、ハゼはあくまでハゼそのものであり、「男神」もしくは「男性」を表すものではないということではなからうか。春成氏が指摘したように、石棒は儀礼の種類に関わらず「活力の象徴」であった。その活力を用いて、全ての事象を包括して良い方向へと導いてくれる守護的な役割を果たしていたと考えられる。これはハゼの持つ活力から出来上がった信仰であり、それは決して「男性の持つ活力」ではなかった。ハゼは独立した活力の象徴であり、男性自身もそのように考えていたのだと思われる。それが、ハゼの形象はあれども男性の全身を模した土偶のような造形品が普遍的なものではなかったことの原因であろう。埴輪にはハゼを露出した男性像が数点確認できるものの、この埴輪自体が信仰対象であったわけではない。千葉氏の説くようにハゼに対する狩猟民的信仰から埴輪が制作されたのだとしても、先にあつたのはハゼ自体に対する信仰であつただろう。男根崇拜は男性崇拜とイコールではなかったと考えられるのだ。だからこそ神話にも男神のハゼへの信仰を強調したような描写がないのであろう。ハゼは既に身体の一部という概念から離脱し、一つの象徴的信仰対象として確立していたのだ。それは神話の描写からも読み取ることができる。神話には男神・男性のハゼを強調した神話はないが、丹塗矢伝承のように男神自体がハゼを象徴すると思われる物体へと姿を変えろという説話が見られる。これはハゼが男神の身体の一部から既に独立した象徴的信仰対象となっていたか

からこそ、男神がハゼそのものになるということを神話的に表現したものであろう。

一方、女性の身体に関する信仰は男性のそれとは全く真逆とも言えるものであったと考えられる。

前述したように、土偶における母神の表現方法は乳房や膨らんだ腹であり、ホトではなかった。そして古代の日本にはホトのみを造形するという文化は殆ど確認できない。これは信仰すべき対象はものを生み出すホトそのものではなく、地母神の身体、特に孕んでいる状態であったからだと考えられる。身体ではなく独立したハゼのみが信仰対象となった男性の例とはまさに逆で、地母神の本質は母体であったのだ。

しかしその一方で、神話からは明確なホトの神聖性を読み取ることができる。最もホトの神聖性を描き出しているのはアメノウズメの神話で、これはホトに何らかの力を見いだしていたからこそ成立したものである。また土偶と限りなく近い信仰を背景に持つと思われる地母神であるイザナミも「ホトを使って」人間の為に有益な火であるカグツチを産み出した。これらの神話に見るホトへの信仰と土偶から見る母体への信仰とはどのように共存していたのだろうか。

### 第三章

#### 現実の女性と理想の女性

ここまでのホトや土偶を巡る考察の中で中心となってきたのは、イザナミのような地母神への信仰である。地母神はいわば母なる大地を具象化して描き出したもので、女神信仰の中でも特に原始的で抽象的な信仰対象であるといえる。しかしその地母神であるイザナミに対し、松村一男氏は「現実の女性の属性」を見いだした<sup>(42)</sup>。一見現実の女性とは最も遠い位置にいるように思われるイザナミであるが、松村氏曰く、イザナミが

体験した産褥、死の世界の穢れ、夫との愛情関係・夫婦関係の終結などがまさに現実の女性の属性を体現しているという。そしてこの現実の女性というのは「理想の女性」の対極にあるものとして指示され、その理想の女性として位置づけられているのがアマテラスだと松村氏は指摘した。皇祖神を女性だと定義づけることに對して少なからず抵抗感のあつた男性社会が、ジレンマを解消すべく生み出したのが「女性の本質である母の役割は担いながらも男性の側に立つべく意義づけられたアマテラス」という女神だという。アマテラスは男性が思う穢れ（松村氏曰く、出産）を排除し、ウケヒという非現実的な方法で処女のまま子供を産んだことで、男性に都合良い存在である処女神として「理想の女性」に位置づけられたのである。女性の血に関する穢れの概念はおそらく古いものではなく、出産が穢れとして忌避すべきものであるとする点には疑問が残るが、確かにイザナミは死という穢れを初めに体現した神であり、その性質はまさしくアマテラスの対極にあると捉えることができる。

産道及びホトを使った出産方法もまた「現実の女性」のものであり、「理想の女性」及び処女神とは結びつかないものであろう。つまりイザナミがホトからカグツチを産むのは「現実の女性」であるからだと考えることが出来る。女性がホトから子供を産み落とすのは当然のことであるが、それを改めて神話化することでイザナミはアマテラスと対極化した。

これはイザナミのホトを使った出産が「火を生む女神」としてのものではなく、「現実の女性」としてのものであったということなのである。地母神として火の神を孕んだという神話と、現実の女性として火の神をホトから産み落としたという神話は、本来別サイドからのものであったと考えられる。それが結合したことで、「ホトから火の神を産む地母神」というイザナミの像が完成したのだろう。

そしてこれこそがまさに、ホトの形象文化と神話描写に差異が生まれたように感じた理由であったと考えられる。時代の流れの中で地母神の象徴と信仰形態が変化した可能性を前章で提示したが、実際はそうではなかっただろう。原初的な地母神への信仰形態というものは神話の中にも受け継がれ、描かれていた。しかしその地母神たるイザナミがホトを使つて火の神を出産したことにより、イザナミの地母神という神格の象徴がホトにあるかのような錯覚が引き起こされていたのだ。ホトを破壊されることで屈辱的な死を遂げたイザナミ、ヤマトトトヒモソヒメ、ハタオリメは皆松村氏の言う「現実の女性」であり、それぞれがマイナスの意味を持つ死をホトの破壊によって引き起こされている。つまり神話におけるホトの役割のひとつは、「現実の女性」がマイナスの死を遂げる際に破壊されると言えるのだ。

古代においては男性優位の意識と女性の靈力に対する畏敬の意識が共存していた。神話にはそういった男女の複雑な関係性が反映され、複層的に女性像が構築されているのだろう。純粹に信仰すべき原初的な地母神像と社会的に産み出された「現実の女性」像が、イザナミという女神の中で統合したのである。

総括と結論

ここで一度これまでに取り上げたホトが登場する神話を纏めると、以下の表のようになる。

	イザナミ	地母神	ホトが表すもの	女性像	神話の示すもの
	ウケモチ・オホゲツヒメ	地母神	なし		女神の死
	ヤマトトヒモソヒメ	巫女	死(生の破壊)	現実	農業食物起源
	ハタオリメ	巫女	死(生の破壊)	現実	禁忌を犯す
	セヤダタラヒメ	巫女	生殖と出産		神と巫女の交接
	アメノウズメ	巫女	神聖性	理想	岩戸開き

まず、ウケモチとオホゲツヒメの神話は既に述べたように地母神信仰を色濃く反映した農業・食物起源説話である。この神話にはホトが登場するが、地母神の本質はその母体そのものであると考えられていた。従ってウケモチ・オホゲツヒメ神話に登場するホトはあくまで身体の一部に過ぎず、ホトに対する特別な信仰に基づくものではない。地母神の身体に作物や家畜などが生じるといふ思想自体に、ホトに対する個別の信仰は本来含まれていないのだ。

しかしホトというのは元來、神聖な力を持つものであった。それを描き出したのがアメノウズメの神話だ。アメノウズメのホトを露出する姿は男性社会が作り上げた、「理想の女性」の属性であると考えることができ。古代では女性の持つ靈力というのが信じられており、その力の源となるのが女性性の象徴でもあるホトであった。永藤氏はこのホトに豊穰性を見いだしたと前述したが、そのような思想は神話の背景にはないだろう。豊穰性とは地母神の孕む力から連想された観念であるし、その力は母体にこそ宿るものであるからだ。ホトが内包するものは、もつと根源的な生そのものと女性性、そしてその女性性に宿る神聖性であると考えられる。

その女性性及び生の象徴を破壊することで女神の死を描いたのが、ヤマトトヒモソヒメとハタオリメの神話である。それぞれ禁忌を犯した罰、アマテラスが石屋戸隠れる原因として女神は物語の中で死なねばならず、その方法として選択されたのがホトの破壊なのであった。ホトが生象徴であるからこそそれを破壊することで死に繋がり、また女性性の象徴であるからこそ、その破壊は女神の尊厳を否定する屈辱的な死という意味を持っていたのである。

無論、生殖と出産というホトの本来の機能が描かれたセヤダラヒメの神話の例もある。これは子どもを生み出すホト自体に一種の生産性が元來内包されているという公然の事実を神話化したものだ。流れてきた弓箭でホトを象徴する暗い洞窟を射通したことで生まれたという佐太大神の説話もこの部類だろう。佐太大神説話では佐太大神の母であるキサカヒメのモチーフである貝がホトと結びつくことから、この女神に生産性・豊穰性を見いだすという解釈が一般的である<sup>43)</sup>。しかしむしろキサカヒメの豊穰性はこの女神が元來的に地母神の神格を持つていることに由来するものであろう。キサカヒメは古事記・出雲国風土記においてキサガイヒメという名でカミムスヒと関わりが深く、更に古事記ではカミムスヒに遣わされ、オホクニヌシの蘇生の為にウ

ムギヒメと協力して「母の乳汁」を塗るといふ場面が登場する。この「母の乳汁」はキサカヒメが赤貝、ウムギヒメが蛤の神であるとされることから、粉末にした赤貝の殻を母乳に見立てた蛤の汁に混ぜたもので火傷の治療に使った民間療法の薬であるとする説<sup>44)</sup>があるが、西郷信綱氏は母乳自体に蘇生させる力があると信じられていたことを指摘した<sup>45)</sup>。西郷氏は臨終間際の子が母の乳を飲んで延命しようとする日本靈異記の説話や、母乳が価値高いという記述が仏典に見られることからこの論を根拠づけている。この母乳への信仰も、まさしく母体への信仰の一端であろう。ホトの生殖・出産という機能は時に信仰に昇華されたが、それは「現実の女性」の能力に由来するものであり、豊穡の観念などとは全く別のものであった。

そしてホトを含む神話群の中で最も複雑だと思われるのがイザナミの神話である。イザナミは最も根源的な地母神でありながら「現実の女性」の属性を持ち、ホト本来の機能である出産をしながらその破壊によって死を遂げた。イザナミが元來的に地母神として火を生むことのできる女神であったということはオセアニアの神話との比較を見ても明らかなことであると言える。しかしイザナミが「現実の女性」であるからホトを使った出産を行ったのであって、ここで描かれるホトはあくまで産道の機能を担っているに過ぎない。地母神の本質は「ホトから火を生み出すこと」ではなく「火を生み出せる母体」である。「火を生み出すホト」自体に特別な豊穡性といった側面を描き出しているわけではないのだ。ホトの出産という機能と、人間にとって有益なものを生み出してくれるという母体に宿る地母神信仰の間には明確な線引きがされねばならない。このイザナミのカグツチ出産神話におけるホトの一次的な意味はむしろ、ヤマトトトヒモソヒメやハタオリメ神話と同じ「女性性・神聖性を否定するために破壊される装置」であるといえる。神話の構成としてイザナミは死なねばならず、その死は黄泉の国へと繋がる特殊なものであった。黄泉の国での腐敗したイザナミの身体は、



まさにこのホトの破壊によってもたらされた。出産自体に穢れ概念があったとは考えにくいだが、そのあとに死の穢れが続くことを考えれば、このイザナミの死もまた女神の尊厳を否定する屈辱的な死であったのだろう。イザナミの神話には①地母神として火を生む女神がいるという原初的な母体信仰、②男性社会の中で構築された、ホトを使った出産をする「現実の女性」の属性、③死の穢れへと繋がる、ホトの破壊による屈辱的な死、といった要素が確認できる。イザナミの神話はこれらの思想・信仰から複合的に構成されたと考えられるのである。地母神であるイザナミがホトを使った出産をしたことから同文化圏の信仰と同じく女神の「ホトに」火が宿ると捉えがちだが、イザナミの場合はその火を孕んだ状態こそが原初的な地母神信仰の名残であった。

以上、神話における性器の描写について考察を行った。

縄文時代以降石棒などの造形品を用いた信仰が確認されるハゼは、活力の象徴として独立した信仰対象であり、男性の身体からは切り離された存在であった。従って男性原理社会の構築に利用されることはなく、神話にも登場することはなかった。

一方神話に多く登場するホトは、今までその生むという機能から豊穣性や生産性を見いだされることが多かったが、実際地母神として信仰されるのはホトではなく母体自体であった。そして神話に散見する「ホトと死」の説話には、生の象徴であるホトを破壊することで死を表すという意図があり、またホトが女性性及び女性の神聖性の象徴であることから、その破壊は単なる死ではなく女神としての屈辱的な死を表していたと考えられる。神聖性が認められていたからこそ、ホトは時に女性性を否定するための「破壊される装置」として機能したのである。

神話に描かれたホトと神話に描かれなかったハゼは一括りに出来るものではなく、その背景にはそれぞれ全く異なる思想が投影されていたという論で結びたい。

引用・参考文献一覧

- (1) 大林太良、吉田敦彦『日本神話事典』大和書房、一九九七
- (2) 松前健『松前健著作集 11 日本神話の研究』おうふう、一九九八
- (3) 松村武雄『日本神話の研究 第二巻』培風館、一九五五
- (4) 松前健前掲書
- (5) 大林太良『神話の系譜…日本神話の源流をさぐる』講談社、一九九二、三二〇頁
- (6) 松前健前掲書
- (7) 大林太良『稲作の神話』弘文堂、一九八一
- (8) 同書
- (9) 大林太良『神話の系譜…日本神話の源流をさぐる』講談社、一九九二、三二一頁
- (10) 吉田敦彦『豊穰と不死の神話』青土社、一九九〇
- (11) 吉田敦彦『昔話の考古学』中公新書、一九九二
- (12) 同書
- (13) 同書
- (14) 大林太良『神話の系譜…日本神話の源流をさぐる』講談社、一九九二、三二二頁
- (15) 吉田知子『箸墓伝承の成立』『学苑565』昭和女子大学光葉会、一九八七
- (16) 大林太良、吉田敦彦『日本神話事典』大和書房、一九九七
- (17) 佐佐木隆『伝承と言語…上代の説話から』ひつじ書房、一九九五

- (18) 松本信広『日本神話の研究』平凡社、一九七一
- (19) 松村武雄『日本神話の研究 第三卷』培風館、一九五五
- (20) 松本信広『日本神話の研究』平凡社、一九七一
- (21) 三浦佑之『神話と歴史叙述』若草書房、一九九八
- (22) 内藤明『万葉集』の「ますらを」と「たわやめ」『早稲田人文自然科学研究50』早稲田大学人文科学研究所、一九九六
- (23) 永藤靖「アメノウズメの $\wedge$ 性 $\vee$ と舞踏(特集『古代文学に描かれた性』——(上代文学に描かれた性)』『国文学解釈と鑑賞69(12)』至文堂、二〇〇四
- (24) 池田弥三郎『ユーモアのすすめ(人生の本…第7)』文芸春秋、一九六七
- (25) 樋口清之『笑いと日本人』講談社、一九八二
- (26) 松村一男『女神の神話学…処女母神の誕生』平凡社、一九九九
- (27) 永藤靖前掲書
- (28) 神野志隆光、山口佳紀『古事記注解(二)』笠間書院、一九九三
- (29) 能登健「信仰儀礼にかかわる遺物(Ⅰ)』『神道考古学講座 第二卷』雄山閣出版、一九八一
- (30) 村田文夫『縄文のムラと住まい』慶友社、二〇〇六
- (31) 新津健「石棒の信仰(特集 石の考古学)——(石に対する信仰)』『季刊考古学(99)』雄山閣、二〇〇七
- (32) 梅原猛『縄文の神秘』学研パブリッシング、二〇一三
- (33) 春成秀爾「性象徴の考古学」『祭りと呪術の考古学』塙書房、二〇一一
- (34) 須藤健一「社会人類学と性研究」『性の民族誌』人文書院、一九九三
- (35) 千葉徳爾『女房と山の神』堺屋図書、一九八三
- (36) 吉田敦彦、渡辺仁等
- (37) 千葉徳爾前掲書
- (38) 神野志隆光前掲書
- (39) 渡辺仁『縄文土偶と女神信仰』同成社、二〇〇一

- (40) 藤森栄一『縄文農耕』学生社、一九七〇
- (41) 『週刊新発見!日本の歴史 50』朝日新聞出版、二〇一四
- (42) 松村一男前掲書
- (43) 神田典城「佐太大神誕生の周辺」『月刊歴史手帳12(12)』名著出版、一九八四
- (44) 倉野憲司校注『古事記・祝詞(日本古典文學大系1)』岩波書店、一九五八
- (45) 西郷信綱『古事記注釈(三)』平凡社、一九七五

## Description of private parts in Japanese mythology

FUKAZAWA, Kanako

This report is about the description of private parts in Japanese mythology. Japanese mythology has a lot of stories about female private parts.

The first time this appeared is the scene when Izanami gave birth to Kagutsuchi who is the god of fire. Due to this, Izanami's private part is burned and dies. This is the origin of fire story, Izanami is believed as mother goddess. There was faith that mother goddess gave birth to something valuable for humans in the ancient age.

Originally, private parts relate to giving birth and living. However in this story, it relates to death as well as in O-getsuhime and Ukemochi stories described below.

After the deaths of O-getsuhime and Ukemochi, grains grow from some parts of their corpses including their private parts. They are mother goddess and ancient people believed that mother goddess gave fertility after they were killed. We can see the same belief in Dogu and bowl in Jomon era, and in the background of Izanami's story.

In the story of Yamatototihomomoshime, female private part relate to death as well. Since Yamatototihomomoshime broke a taboo, she cannot get married to O-mononushi. In which she dies by getting a chopstick stabbed in her private part.

There is a similar story in Ama-no-iwayado mythology also. It is a story of Hataorime, who dies due to her job tool shuttle stabbed in her private part.

Yamatototihomomoshime's death means retaliation and Hataorime's death is what causes the story of Amaterasu to hide in the iwayado. Both deaths include negative elements, the deaths are not normal. Thus, when female private parts are

broken, it symbolized a negative death for goddesses. This is because female private parts symbolize life itself and woman. Breaking female private parts means stopping life and negative death to denial woman.

However, in the Ninuriya mythology, stabbing the private part causes birth. Due to a red arrow stabbing Seyadatarahime's private part, she becomes pregnant. In this story, red arrow means male private part, and female private part relate to life. Since female private part relates to life originally, the story of stabbing female private part in which caused death was made paradoxically.

Amenuzume's story is one of the most famous for female private part story. In the story, female private part has exorcism power, in which she exposes her private part to make the gods laugh. This then led to Amaterasu to come out from the *iwayado*. The female private part in this story means women's holy power. However, in the background of the story the gods laugh at the female private part show, that there is male society and thought that men believed women's holy power.

On the other hand, there is no story about male private parts.

Although, in the *jomon* era, Japanese ancient people made many stone figures that were shaped in male private parts. The male private part figure, *Sakibo* symbolized energy and god who can bless bad spirits. Male symbol was believed as a single existence, are independent from the male's body. It was not faith in men but in the private part. That is why there are no stories which god's private parts were emphasized.

However in the ancient times, there was no culture to make figures of female private parts. *Dogu* is famous for women's body statue, but there are seldom representations of the private parts. *Dogu* has breasts and represents of pregnancy. It is bound for the faith of mother goddess. Due to this, the faith of mother goddess is from not the female private parts, but the mother goddess's body.

Though, it was believed that female private parts held holy power, the two beliefs had seemed to coexist.

In order to show the coexistence, the classification of “ideal woman” and “actual woman” that Kazuo Matsumura advocated was used. Amaterasu who is a virgin goddess is pure and clean, who represents the ideal woman. On the other hand, Izanami who experienced pregnancy, dead world, divorce represents an actual woman. These images were made by male society. Izanami gave birth by using female private part as an actual woman and not as mother goddess. The belief in mother goddess gives birth something valuable for human is in goddess body.

Ukemochi and O-getsuhime mythologies are the origins of agriculture story. In these stories, female private parts appear, but there is no special meaning. They are mother goddess and give birth to something valuable, but there is no individual belief for female private parts.

However people believed that private parts held holy power. In the ancient era, there was faith that women held holy power, in their female private parts which symbolized women.

Then, Breaking the symbol of living and women, causes goddess's negative death. Yamatotohimomosohime and Hataorime mythologies express this. Breaking private parts what are originally giving birth causes death. When they died a negative death, their private parts, which symbolized of women's holy power, were broken. By doing so, this made a denial their dignity.

On the other hand, Seyadatarahime's Ninuriya story is simply about sex and birth. Sometimes people believed female private parts as use for reproduction, and it did not relate to faith in mother goddess and fertility.

Izanami's story is complexly structured. It is made from three elements, 1) primitive faith that mother goddess gave birth to god of fire, 2) actual women who gave birth by using her female private part, 3) negative death by breaking the female private part, and it bound for uncleanness of death. Izanami gave birth as mother goddess, but the giving birth by using female private part is not derived from the personality of mother goddess. It is as an actual woman, and, the private part was

a “device that is broke” to denial woman.

Female private parts in Japanese mythology means symbol of living that is from the function, moreover, it means woman's symbol. People believed that women's holy power is in female private parts.

Female and male private parts cannot be represented as a whole. This is due to the different beliefs in which the ancient people held.

(日本語日本文学専攻 博士前期課程修了(平成二十七年))